

オペラ歌手としての歩みについて語る

30年の歌手生活を迎えた

取材・文・写真＝中東生
Text&Photo＝Shinichi Naka

ヴェツセリーナ・カサロヴァ

世界的メゾソプラノ歌手のヴェツセリーナ・カサロヴァが今年デビュー30周年を迎えた。ブルガリアに生まれ、ブルガリア国立ソフィア音楽院在学中にデビュー、1989年にチューリヒ歌劇場と契約し、その後またたく間に世界のディーヴァとなった。そのカサロヴァを縁の深いチューリヒでインタビューした。

常に軌道修正しながら
声を正しく成長させてきました

本人が気づいていなかった30周年

今年デビュー30周年となるヴェツェリーナ・カサロヴァだが、「この30年間のキャリアの変遷に関してお話を」と振るま

若いころの学び場

30年の年月が経つのは速いものですね。ソフィア国立歌劇場でデビューした時の役柄ですか。ちよつと思ひ出させて下さい……あ、ヴェルディ《運命の力》のプレツィオシルラでした！あの劇場では他に、ヴェルディ《ナブッコ》のフェネーナやロッシーニ《セビリヤの理髪師》のロジーナなどを歌いました。まだ学生だったのですが、ゲーナ・デミトローヴァが4、5人の学生を集めて開いてくれたコンサートでもロジーナを歌ったところ、現在もフランクフルト在住のルーマニア人エージェント、ルイザ・ラツセルペトロフがそのテープをカラヤンに送ってくれて、それからザルツブルグ音楽祭に縁が繋がって、1989年にチユーリヒ歌劇場と専属契約をしたのです。

きたこの時代は、私にとってまさしくお金では手に入れない「学び場」でした。若い時は、周りに見えるものすべてから、自分が必要なものを吸収する才覚が大切です。困難な場面での対処法も見ながら学びました。例えば彼らが指揮者や演出家と喧嘩するシーンを見ていて私が学んだのは、周りを巻き込まずに、一対一でダイレクトにお願いする方法です。「この部分で私はとても困っているのだけれど、助けてもらえますか？」と頼むと、良い方向に解決するのです。

ホーレンダーのアドヴァイス

25歳の時にボルドーで、ミレッラ・フレニーがエリザベッタを歌ったヴェルディ《ドン・カルロ》に出演しましたが、それを聴いたイオアン・ホーレンダー氏（劇場インテンダントとして著名）に「上手く歌えているけれど、これでヴェルディのことは忘れろ」と宣告されました（一）そこでモーツァルトやハイドン、ベルカント（※ここではロッシーニ、ドニゼッティ、ベツリーニなどの19世紀前半のイタリア・オペラを指す）をレパートリーにしたのです。同じような忠告をされて従わなかった人たちもいて、その気持ちも理解できますが、私は従って良かったと心底思います。そうでなければ、こんなに長く歌って来られなかった

きわめて気さくで、皆に愛されているディーヴァだ



18年前の出産ですね。声に色合

声と役の遍歴

声に影響を与えたのは、

術家の伴侶は楽ではないと思います（苦笑）。

でしよう。同世代ですでに歌えなくなった歌手たちを多く知っているから、私も若い歌手たちに同じようなアドヴァイスをしています。モーツァルトは声を養生させてくれるし、フレージングも基本に戻らせてくれます。そこからベルカントへ派生させていけるのです。この節制時代にもチレア《アドリアーナ・ルクヴール》のプイヨン公爵夫人は多く歌っていました。その後には必ずモーツァルトなどに戻るようにして、30年間、常に軌道修正しながら声を正しく成長させてきました。私生活が音楽に与える影響ですか……結婚した1992年からは「安全」が与えられたでしょう。夫との出会いはまるで作り話のようで、彼がロック・コンサートに行きたかった晩、チケットが取れず、代わりに聴いてみたチャイコフスキー《エフゲニー・オネーギン》で私を見初めたらしく、14、15回、公演に来てくれました。それから2年後に結婚し、すべて共に築き上げてきたので、とても大切な存在です。今まで精神科医にかかることもなく、元気に歌ってこれたのは夫のおかげです。歌手であることの代償は、孤独な旅ガラス生活で、ツアー中のすべてを持って家に帰って来るので、芸術家の伴侶は楽ではないと思います（苦笑）。

いが出てきて、重めになりました。更年期では喉の乾きを覚えたほか、発声練習を前より長めにするようにしています。あとは微量のホルモン剤を摂取して、こうして調子良く過ごすことができているので、常に微調整をしながらの30年でした。日本に初めて行ったのはグルベローヴァとのデュオでした。去年はウィーン国立歌劇場のR・シユトラウス《ナクソス島のアリアドネ》で7年ぶりに日本へ行かれると思っていたのに、父が他界したためキャンセルせざるを得ませんでした。2年以内くらいにオペラ・アリアのコンサートかリーダアイベントでまた日本に行けるように調整中です。来年は私にとって未踏の大陸であるオーストラリアで、ピゼー《カルメン》を歌います。現在までに歌った役は55、56にもおよびますが、一番最近の初役はバルトーク《青ひげ公の城》のユディットです。演出家の実験台にされるのを避けながら、将来歌ってみたいのはサントウツァ（マスカリーニ《カヴァレリア・ルステイカーナ》）とアムネリス（ヴェルディ《アイーダ》）、そして時間はかかるでしょうが、アズチエーナ（ヴェルディ《トロヴァトーレ》）です。マクベス夫人（ヴェルディ《マクベス》）のオフアーもありましたが、一生歌わないでしょう。コンサート活動も十分楽しんでいますが、マスターコースで教えるのも好きです。私はたまたま幸運に恵まれましたが、それに感謝しながら、これからも歌っていきたくと思っています。（談）